

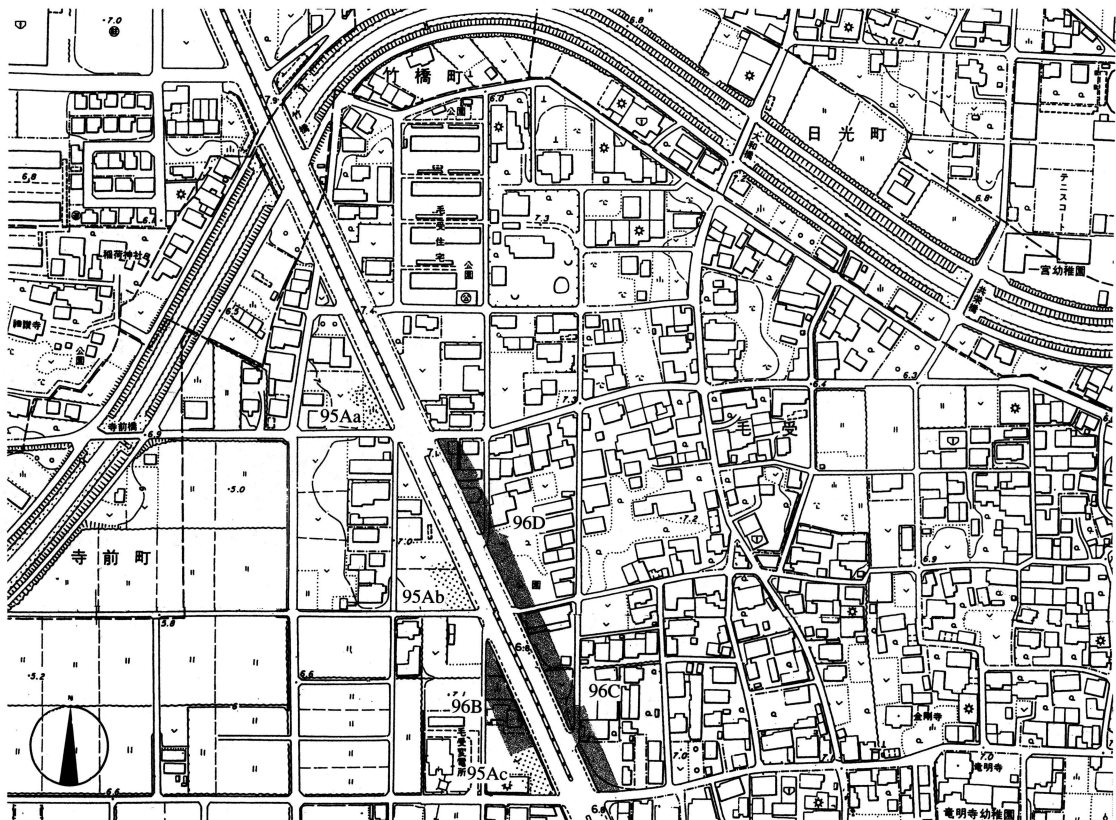
めんじょう 毛受遺跡

調査の経過 毛受遺跡は、一宮市大和町毛受到に所在する。本遺跡は、尾張平野の北部をやや蛇行しながら南に流れる日光川の上流域にあたる標高7 m前後の自然堤防帯の上に分布する。

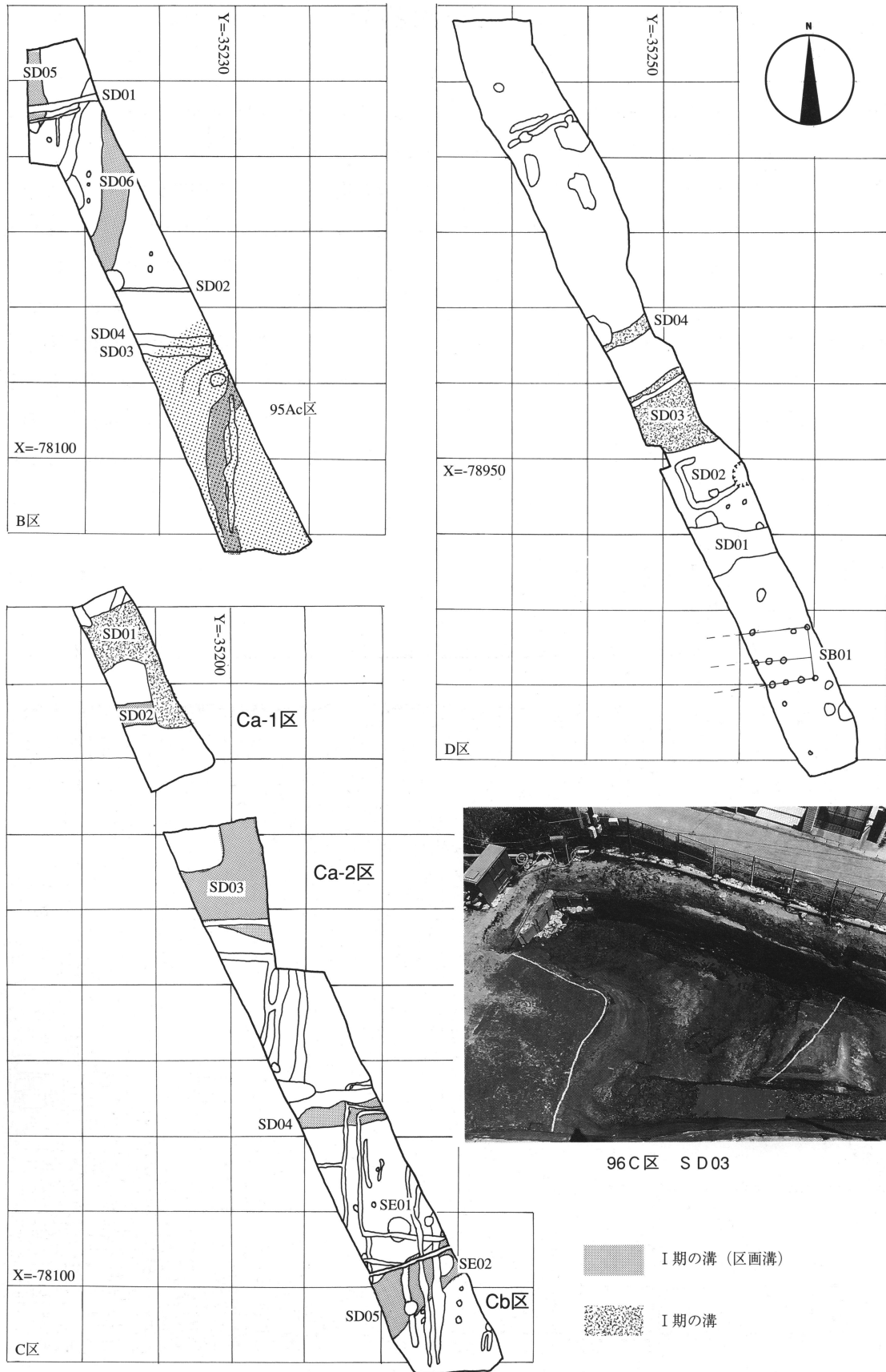
発掘調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として平成7年度より実施しており、本年度は西尾張中央道を挟んで西側にB区、東側にC区・D区の3つの調査区、合わせて4,115㎡を発掘調査した。調査期間は4月～10月である。(浅井 厚視)

調査の概要 毛受遺跡の基本層序は概ね、第1層：盛土（攪乱土）、第2層：黄灰色～黄褐色砂質シルト、第3層：暗灰黄色シルト、第4層：暗灰黄色～黄褐色シルト、第5層以下は基盤層で、黄褐色の粘土質シルトもしくはそれと灰黄色の細粒砂との互層となる。部分的に第2層と第3層との間に洪水性の堆積である細粒砂層が挟まれている。遺構の時期は、第2層で検出したものが江戸時代後期、第3層で検出したものが室町時代後期にほぼ相当すると思われる。ここでは後者の時期をⅠ期、前者の時期をⅡ期とに区分する。

B 区 95A c区のすぐ北に位置する。S D02・03・04は、調査区を東西に横切っており、何らかの方向性をもつと考えられる。S D05は、方形にめぐる区画溝と考えられる溝で、検出したのはその南東角にあたる。断面箱形に掘削されており、常滑産の甕などが出土した。



第1図 調査区位置図(1:5000)



第2図 96B・C・D区遺構配置図 (1:800)

この調査区の北西側周辺に当該期の屋敷地の存在が想定できよう。S D06は南北方向をS D05にほぼ同じくする溝で、検出した面での幅約2m、深さ約1.2mを測り、断面箱形である。この溝の最下層からは漆椀が1点出土した。S D05・06の双方から出土した遺物の時期や、平面的あるいは層位的な位置関係からS D06は、S D05の外側をめぐる区画溝の可能性もある。

C 区 C a-1区は、現地表から下約2.5mくらいまで攪乱をうけていたため、遺構の残存状況は良好ではなかった。調査区内をクランク状に走るS D01は、検出面での幅約7m、深さ約1.5mの大溝である。この溝の最下層から室町時代後期の漆椀、土師器皿などが出土した。S D01に切られるS D02の底面には、太さ約10cmの竹が2列に並べられており、さらに調査区の西側へ延びていく。内側の節は抜かれていたので、水を流す導管のような構造物の一部であると思われる。C a-2区からC b区にかけて、東西・南北の方向性をもったⅡ期の区画溝が展開する。天保年間に描かれた村絵図によれば、当時この付近まで毛受村の集落が広がっていたことが窺えるので、これらの溝が、集落（町屋？）内を区画していたと考えられる。またS E01・02はいずれもこれらの区画溝に切られていた。S D03は、検出した面での幅約10m、深さ約1.5mを測る、断面箱形に掘削された溝で、その形状や、埋土の堆積状況か居住域（居館のような屋敷地）を囲む「堀」の南東角と思われる。S D02とS D03とで囲まれた約10m四方程度の規模の屋敷地が想定できよう。S D04からは、下半分は欠損していたが、木製卒塔婆が1点出土した。このことからこの溝もまた、居住域を区画するしていたと考えられる。

D 区 S D01から南側は、C a-1区同様の攪乱をうけていた。S B01は2間×4間以上の掘立柱建物で、ほとんどの柱穴に礎板が残存していた。S B01の方向性は、B区S D05・06、C区S D02・03・04の方向性とはほぼ合致するので、S B01とこれらの区画溝とが同時期の遺構であると考えられる。S D03は、検出面での幅約10m、深さ約2mの大溝で、C区S D01とはほぼ同じ方向に延びる。これら2つの溝とC区S D03などの区画溝とは、いくらか時期を異にするようである。S D04は層位的にS D03に先行していることから、Ⅰ期よりも若干古くなりそうである。

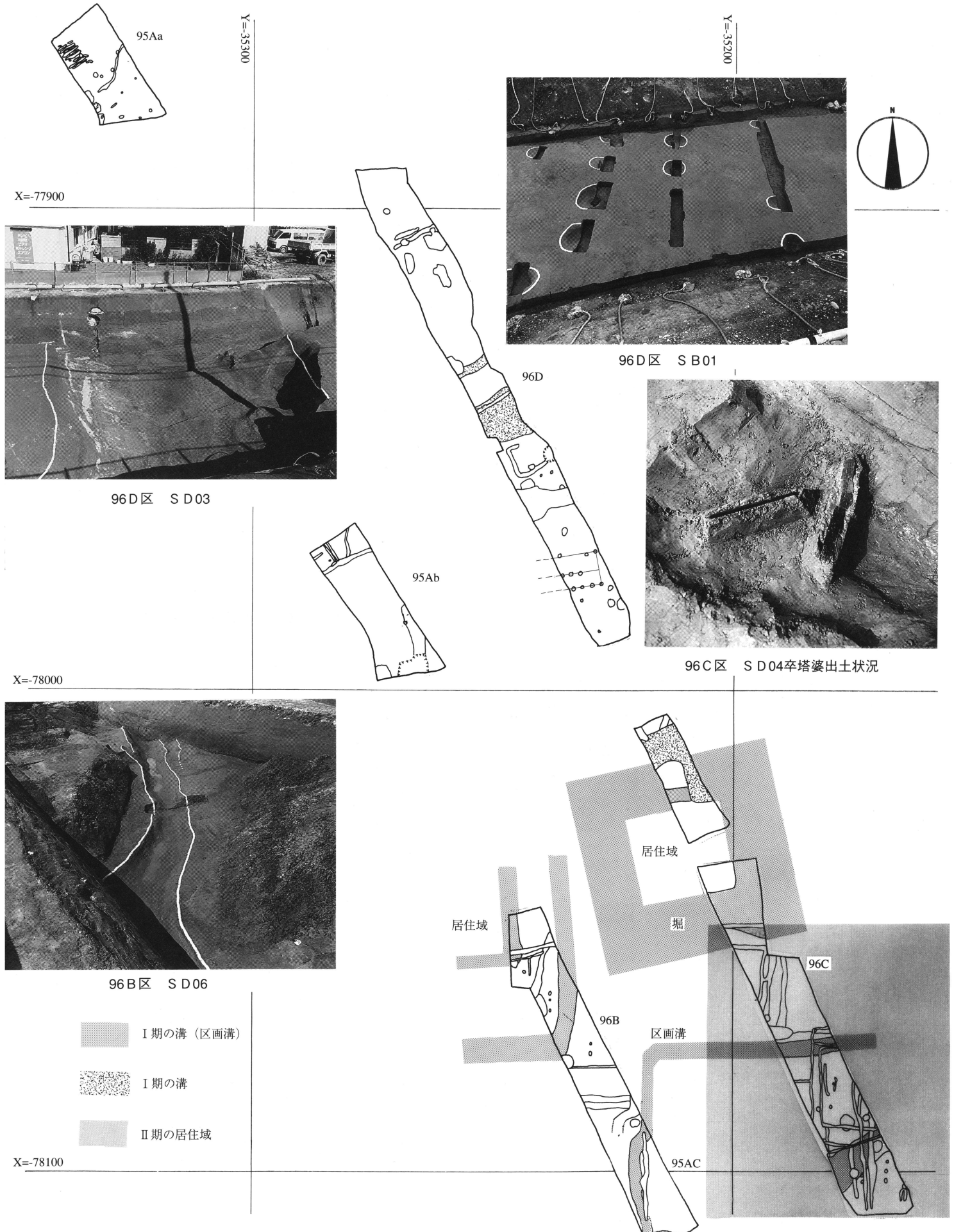
まとめ 昨年度同様に遺物の出土量は、全体的には、さほど多くはなかったが、昨年度の見解を改変すべき成果もいくつか得られた。

①96D区S D04から北では、遺構・遺物ともに稀薄になることから、この付近が毛受遺跡の北端になると思われる。このことは95A a区・A b区の様子からも窺える。

②毛受遺跡の遺構・遺物から、遺跡の時期は、室町時代後期と江戸時代後期との大きく2つに区分される。また前者の時期については、さらに2つに小区分できそうである。

③室町時代後期には、この付近には、いくつかの屋敷地（居館）あるいはそれを囲い込むように区画された居住域が存在していた。それは96B区の西側へも展開していく。

④調査区周辺には、少なくとも天保の村絵図が描かれた江戸時代後期には、企画的にいくつか区画された地割がなされた毛受村の集落が広がっていた。 （飴谷 一）



第3図 毛受遺跡主要遺構配置図 (1:1000)